

## 6年間務めた南京師範大学附属中学

### ・南京師範大学附属中学について

6年間務めた南京師範大学附属中学（以下、南師附中）は、1902年に南京で創設された両江師範学堂をルーツとしています。卒業生も多彩な人材を輩出していますが、中でも有名なのは小説家の巴金でしょう。校内には彼の銅像があります。キャンパス内は至る所に大木や池があり、まるで公園のようです。そして、校内の一角に南京魯迅記念館があります。と言うのもこの学校から東に約300m離れた場所に、魯迅が学んで卒業した江南陸師学堂付設の鉅務鐵路学堂があったからです。



南師附中の生徒数は大変多く、1学年15クラス、各クラス45名前後の生徒が学んでいます。2学年から文理等進路別クラスになり、皆大学に進学します。進路は北京大学、精華大学、上海復旦大学、南京大学など中国の有名な学校に入っていく者が多く、また、毎年、早稲田大学に10名前後が入学します。（早稲田に行く生徒は、9月に入学し、英語で講義が行われるコースです。）

これら15クラスの他にインターナショナルスクール（IBクラス）として3クラス（各クラスは22名前後）あり、中国語以外はすべて英語で授業が行われています。もちろん教材も世界共通のものが使われ、アメリカ、カナダ、イギリス等の国々に留学していきます。

私が勤める桜丘高校は、1982年から南師附中と交流を始め、今に至っています。1985年からは相互に毎年一人ずつ先生を派遣し合い、桜丘では中国語を南師附中では日本語を教えるという関係が30年続いてきました。この間に両校がお互いに得たものは多く、双方の学校に多大な影響を及ぼしてきました。桜丘高校では、中国教員と日本人が協力して教える中国語の授業を取り入れ、本物の中国語と文化を教えることができました。

また南師附中でも桜丘高校から学んだことは多く、「50キロ夜間歩行」や生

徒が中心となって作り上げる「卒業式」、「文化祭」などにその影響を色濃く感じます。週2時間連続して取ることのできる選択授業（この中に日本語もあり）などは、中国ではあまり見かけない日本の香りがする内容が大胆に盛り込まれていて、単なる詰め込み教育ではないようにしようという意気込みを感じます。

私の授業はというと、高校1年生と高校2年生の選択日本語と週1時間ある社团（金曜日の8時限目にあり、昔の必修クラブのようなもの）がメインです。サブとしては、南師附中から車で約1時間離れたところにある分校（ここは初級中学で中学1、2年生）の日本語も担当していました。ここではカリキュラムもなく自由に教材を使い相手に合わせて教えることができました。



### ・南京師範大学附属中学の一日

南京師範大学附属中学（以下、南師附中）の1日はこんな感じです。例えば1年1組の月曜日の時間割は、以下の通りです。

朝の読書（AM7：30～AM7：50）

1時限 国語（AM7：55～AM8：40）

2時限 国語（AM8：50～AM9：35）

体操の時間（AM9：40～ ）

3時限 化学（AM10：10～AM10：55）

目の体操（AM10：55～AM11：00）

4時限 体育（AM11：10～AM11：55）

《昼休み12：00～ 》

5時限 スピーキング（PM1：30～PM2：15）

6時限 生物（PM2：25～PM3：10）

目の体操（PM3：10～PM3：15）

7時限 政治 (PM 3 : 2 5 ~ PM 4 : 1 0)

8時限 HR (PM 4 : 2 0 ~ PM 5 : 0 5)

朝が AM 7 : 3 0 と早いので、校内にある食堂で生徒も先生もご飯を食べることができます。食堂は、何と 6 時 4 5 分から開いています。私の宿舎から歩いて 5 分もかからないのでよく使います。日本円で 6 0 円も出せばおかゆとザーサイ、ゆで卵に肉マンなどを食べることができます。これは日本でも取り入れたいことの一つです。



朝の読書は日本と違いみんな同じ本を読みます。月、水曜日が中国語での音読で、この時、生徒代表が教卓に立ち先に本を読み、他の生徒が唱和する形式がとられます。火、木曜日は英語でやります。英語の時は聞き取り中心で、放送か代表の生徒が読んで、みんなは書くという形式です。金曜日は HR でおもに担任が話を進める会をします。

授業は 1 時限が 4 5 分間の 8 時間授業で、8 限目は特別時間と言った感じで、月曜は HR (生徒主体の会)、金曜は必修クラブ (文化系、運動系含め 3 0 ~ 4 0 くらい)、火曜から木曜は、国、英、数の自習と質問時間に当てられています。授業の合間に 5 分間の目の体操があります。これは、中国全国共通で音楽に合わせて目の疲労を緩和するものです。生徒によると小学校 1 年生からするそうで、彼らは音楽が無くてもすることができます。この体操が午前と午後 1 回ずつあり、みんな教室で座ったままやっています。(もっともその割には眼鏡をかけている生徒が多いのが気になります。) また、南師附中の体育の先生が考えた体操が午前中に 1 回、グラウンドで行われています。この体操は各学校によって異なります。南師附中では武術を取り入れた体操をしています。こんなところが実に中国っぽいですね。

お昼休みは 1 時間半あって、家が近所なら家に帰って食事を取ることもできます。もちろん食堂で食べてもいいし、コンビニのようなスーパーも学内にありますので、ここでパンや食べ物、飲み物を買うこともできます。中には近所のレストランやケンタッキーなど、ファーストフード店に行く生徒もいます。自由でのびのびしていて日本よりかなり便利です。日本ではほぼありえないでしょう。

授業後に日本で言う部活に参加する生徒は、少ないそうです。やはり毎年 6 月

6日前後に2日間にわたって行われる(各省)統一試験「高考」で、いい点数を取ることが第一だからです。「高考」は1年に1回しかありません。この試験の結果で人生が決まってしまうと言ってもいいすぎではないくらい大切なテストなので、みんな真剣です。

8時間授業が終わってからも夜、学内で自習することも可能です。終了時間は高校1,2年生は午後9時30分、高校3年生は午後10時までとなっています。職員室には、担当の先生が交代で待機していて面倒をみているそうです。まったく至れり尽くせりですね。

## ・学校や生徒の様子

日本と全然違うのが使っている筆記用具です。日本ではシャープペンシルか鉛筆でノートを取り、消しゴムで消すというのが主流ですよね。こちらではボールペンで書き修正テープで修正するのが普通です。というのもテストでもカンニング防止のためか、すべてボールペンで書かなければならないのです。

カンニングといえば、その防止にかなり気を使っています。例えば定期テスト(中間、期末)の時、自分のクラスでテストを受けることはできません。テスト2,3日前になるとコンピューターでクラスをバラバラにしたテスト用の教室が用意され発表されます。そして、そこで受けることになります。まったく知らない人の中で、カンニングできないようにしているのです。また、私物はすべて自分のバック



(リュックが多い)に入れ、教室の外の廊下に置かなければなりません。徹底しています。なお、「高考」に至ってはもっと厳格です。

教室はほぼ日本と同じくらいの大きさです。黒板は横長に2枚あり、左側の黒板が右の黒板の上に重なるようにスライドするように作られています。左の黒板を右にスライドするとホワイトのスクリーンが出てきます。教卓にコンピューターが備え付けられ、天井にエプソンのプロジェクターが取り付けられていますので、先生方はこれらを自由に使って授業をすることができます。生徒も特に断ることなく使っています。後ろは、生徒のロッカーになっています。この

ロッカーの一角にもコンピューターとモニターが1台はめ込まれており、生徒は自由に使うことができます。こうした設備はすべての教室にあり、日本の現状を考えれば、まったく羨ましいかぎりです。生徒は多くの教科書や問題集やノートをロッカーの中だけでなく机の中や机の上に置きまくっています。すっかりした日本の教室とは全然ちがいます。

ここで生徒と先生の服について紹介します。毎日、生徒が着ているのはジャージです。体育の時に着るのではなく、朝から晩までこの格好です。実際の制服もあるのですが、年に数回の儀式の時のみ使い、いつもはジャージが制服代わりになっています。女子もスカートをはいている子はほとんどいません。さらに今は寒いので学校指定のグリーンのフード付きダッフルコートを羽織っています。指定のコートさえ着ていれば中に何を着ていても良いらしく、セーターやジャージでないものを着たりはいたりしている者もいます。

では先生はというと、背広姿で授業している方はいません。もちろんネクタイもしている人はいません。普通に街に遊びに行くような恰好で授業をしています。もちろんジーンズの人もあります。職員もこんな感じですので、知らない職員なのか先生なのかわかりません。ましてや関係者なのか外部の人なのかもわからないくらいです。私もすっかりなじんでしまったので帰国してからが心配です。

ほとんどの生徒は自転車や公共交通機関を使って学校に来ますが、車やバイクならぬ電気自転車で送迎をしてもらっている生徒もいます。これが小学校になるとほぼ100%家の人が付いてきます。最近ではおじいさんやおばあさんが送迎にあたることもあります。このため小学校の登下校時は、正門の周りは黒山の人だかりになっています。そして、生徒の勉強道具をおじいさんが持ち、本人は手ぶらで歩いている光景をよく目にします。このまま子や孫を甘やかし続けて本当に大丈夫なのかと、こちらが心配するほどです。

また、広い校内は専用のガードマンが24時間警備にあたっていて安全です。

私も何度も正門で引っかかり、「あなたは誰だ」「どこへ行くんだ」と散々聞かれ、1年以上かけて、やっと顔を覚えてもらいました。こうした環境で生徒たちは、安心して学んでいます。そのためか教職員子弟の入学率もかなり高いようです。そして非常に今時ですが、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、シンガポール、日本などに留学させ



ている先生や職員も少なくありません。

中国の学校というと、とにかく暗記主義でガリガリに勉強しているイメージでとらえがちですよね。実際そういう面も少なくないですが、意外にのびのび学んでいることを感じました。コンピューターやスマートフォンが隅々まで浸透しており、すぐにこれらで調べられます。日本についてもよく知っています。「百聞は一見にしかず」とはよく言ったものです。今回、普通の宿舎で中国の人たちにまじり生活をしました。もちろん授業でも通訳をしてくれる人はだれもいません。悩み苦しみ楽しんだ3年間だった気がします。その分得るものも多かったと実感します。この経験がこれからどう生きていくのか楽しみです。